

ものがあつた。

三月から四月と亡くなる者は少なくなってきたが、地表が解け始める五月までに、実に千名の一割を越す百数名が倒れていったのである。

春が来ると作業にもなれ、虚弱者も減少したこともあつて、ほとんど死亡者も出なかったが、入ソから八か月間は、飢餓と極寒の戦いで生死をわける生き地獄そのものであつた。

幸せにも今日生あるを思うとき、故国生還を夢みながら無念の死を遂げ、酷寒のシベリアの凍土の地下で、裸で眠っている同胞たちが痛ましい。ただただ靈安られとご冥福をお祈りするばかりである。

非人道的、屈辱の被抑留に堪えて

広島県 原 修 三

山田 今日遠路をおいで頂き、ごくろう様です。これから時間を約三十分位の聞きとりをさせて頂きま

す。

先ず 軍歴を簡単に、

原 昭和十年徴集で、昭和十一年一月、歩四十一に入隊、翌八月一日宇品港出発、釜山經由で日中事変に参戦、昭和十三年一月一日南京入城、上海を経て二月十二日青島上陸、同年十二月ハイラル到着、昭和十九年八月関東軍直轄機動第三連隊に編入され終戦になりました。

山田 で、終戦当時の状況を、更に特に印象に残るものがありましたら。

原 丁度私は昭和二十年八月、曹長教育の為、駐屯地の公主嶺を離れていて、八月九日ソ連の進攻があり、八月十二日原隊に帰着しましたが、主力は既に出陣しており、早速追及のため軍司令部に到着、その時点で終戦の気配を感じました。中隊に到着の時点では、既にソ連軍の支配下にありました。連隊長の若松中佐は古武士の風格を備えた人で、相当熟慮されたようですが、遂に筆銃で自決されました。場所は東満の延吉（関東）でした。

山田 立派な方でしたネ。実は私も公主嶺の山上で割腹の寸前、中隊の下士官数名により、隊長殿々々の声で、既に抜いていた刀をおさめた経験があり、連隊長の心情が惻々と解ります。で、その後は如何でしたか。

原 そこで、連隊本部は同所の下士官候補者教育隊の兵舎、下士官以下は、その周辺野原に急造の土窟のテント兵舎に。将校以上が前述兵舎で私は准尉で年令は三十歳、妻帯者ということで炊事の世話役（給与係）をやりました。特に印象に残っている事は、満州各地から、軍人、民衆の家族の婦女子が護送され、同所に収容されましたが、特に幼児が疲労と栄養失調のため次々と亡くなり、兵舎の西方の小山に新しい墓標が毎日増加した事です。話によりますと、婦女子の収容所にはソ連としても立ち入りを禁止していたようですが、夜間、勤務時間以外、下級兵士が銃剣を構えて押し入り乱暴狼藉の限りをつくしたようで、同行の中に、花柳界の方が進んで犠牲になられていたと聞いた事もあります。全く悲惨の極でした。このようなことで、

食事也十分ではなく、牛乳等もなく、母親の恐怖感と疲労が母乳の欠乏を招き幼児の死に繋がる等、言葉につくせぬ悲嘆の連続という以外の言葉を知りません。

十月初め頃より、土窟兵舎の兵士たちは次々とソ連領内に連行され、私は最後の部隊、将校梯団の一員として、十一月下旬、延吉を出発しましたが、その時点で、兵員の連行、家族の護送も終わったようです。三日間の行軍でソ連領に入り、二十一年十二月五日汽車（貨車上下二段仕切り）に乗り、シベリア鉄道でタンポフと記憶していますが、「モスクワ」に約六十キロのラーゲルに到着しました。各地から集まった将校梯団で若干の当番兵もいたようで、約三千人ぐらいと聞いております。

山田 生々しいお話、ありがとうございました。これからは収容所（ラーゲル）の移動、労働の様子をお願いします。

原 お前らは食事をする焚物を運ぶのは当然だ、と監視兵五、六人の監視の下、夏切り倒した雪の下の物を拾い出して運ぶ作業で、午前午後三回の仕事、これは

比較的案なもので、その後三月頃、森林伐採隊の募集があり、これに参加しました。少佐が隊長で通訳も含み三十人位の編成でした。夏に切り倒した雑木を雪の下から取り出し、焼却しては植林を容易にするのが目的のようでした。雪解けが終わると、伐採した白樺の幹を車道まで運び、トラックに積み込む作業で、あまり重労働でもないのに、空腹には参りました。食べられそうな山菜を集めるのが作業後の仕事、塩がないのには往生でした。以後も伐採にかかわる作業に従事させられ、その後エラブカに移りました。話によりますと、「エラブカ」は欧州戦線の捕虜の将校が多く射殺されたということで、私等もその二の舞では、と覚悟した事もありましたが、ラーゲルでは、女医で日本語の達者な美人という、今までにない条件のもとで、馬鈴薯や麦の収穫に加えて、原野の掘り起こし（開拓）でした。土地が凍って作業が困難になった十二月頃、また森林伐採隊の編成があり、経験者として参加する事にしました。その作業は伐採された木材を集積場まで運搬することで、その方法は「そり」と一組五人で、

別の道を「そり」を引っ張って山頂に登り、木材を満載して、五人がそりの上に乗り滑り降りるのですが、相当の速度で危険な作業、いつも生傷が絶えませんでしたし、集積場では全員掛声をかけて引っ張り上げる呼んで、満願坂と名付けていました。ノルマは午前午後各二回でした。その頃から疲労が蓄積し、いつも空腹に力仕事にくたびれ、仕事が終わって小屋に帰っても、いつも変わらぬ「カーシャ」と黒パン、でも、時間をかけて咬みしめ咬みしめ満腹感を味わいたものです。丸木の上に薄藁布団、着のみのまま寝転ぶ状態で、明かりと暖房に松やにの薪を焚くので、黒い煙が立ちこめ、鼻の穴は真っ黒、シラミ、南京虫、ノミに悩まされながらも疲れのため眠りつく有様で、隊のあちこちで「ようようあれは死んだげな可哀相なもんよ」のささやき、死ぬと衣服は剝がれ、裸でトラックに投げ込まれ、運ばれたそう。このような悲劇が繰返されるうち、十二月中旬、突然下山の連絡があり、ラーゲルに帰ると、留守中かなりの人員が帰国したようでした。列車でカザンに到りまたまた収容所

に入り、翌二十三年正月はここで迎えました。飯盒の掛盒に一杯のビールの配給があり、最初で最後のビールの味とともに「にがい」思い出です。ここでは建築現場の作業、零下何十度の寒中で、石灰水でセメントを練り、ブロック造りの家居造り。ここで特に苦勞したのは、貨車及び舟で運ばれた石灰、セメント降ろし作業でした。いつも休養中の時間帯に突如狩り出され、作業が、バラ積みめのセメント石灰を袋に入れて集積場所まで運搬するもので、狭い貨車、舟の中のこととて、粉煙で顔中真っ黒、毎回二時間余りの作業でした。以上が六月まで続き、中旬当地出発、六月三十日、ナホトカ出航、舞鶴に上陸七月三日、懐かしの故郷に帰りました。

私達は、幸いにか将校梯団に編入され、作業量及び内容等も、シベリア地区その他の抑留者とは比較にならぬものではありましたが、他国の空の下、侮辱と嘲笑の中、意欲のない作業を強制され、憤激と悲哀を感じつつも、何としても生きての帰国をと、我慢に我慢を重ね忍耐自重の毎日でした。

山田 大変ありがとうございました。たしかに他の地区とは異なる様子でしたね。私も将校ですが、毎日炭坑作業及び地上でも、凍土を割っての建築基礎掘りと作業は厳しく、その上、帰れば帰ったで毎日の如くの取り調べと続き、「死んだ方が」、幾度考えたか知りません。でも原さんが最後に言われたように、何とかして、の一言の為に帰り着いた一人です。本当にありがとうございました。

(聞き手・全抑協広島県連会長 山田 浩造)

敗戦抑留談

熊本県 西川 勝

一年繰り上げの徴兵検査で綏南の満州第八四八部隊(後第一五二三部隊と改称)に入隊した私は、昭和二十年六月、一期の検閲を終わり、東満の国境近い穆林の陣地構築に配備された。

八月九日作業中「ソ連軍が国境を侵し攻撃してきた。